



Title	ジョゼー・リンス・ド・レーゴとフットボールへの狂喜
Author(s)	岐部, 雅之
Citation	ブラジル研究. 2016, 12, p. 53-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106554
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジョゼー・リンス・ド・レーゴと フットボールへの狂喜

岐部 雅之

はじめに

ブラジル北東部パライーバ州出身の作家ジョゼー・リンス・ド・レーゴ(José Lins do Rego, 1901-1957)は、20 世紀のブラジル近代主義文学を代表する文豪であるが、学生時代からジャーナリズムの世界でも活躍した。とりわけ、1945 年以降、『スポーツ新聞』(Jornal dos Sports)で小作品「スポーツと人生」の連載を開始すると、彼自身すでに強い関心を抱いていたフットボール(futebol)について精力的に執筆した。

その小作品とは、ブラジル文学史の中でクロニカ(crônica)と呼ばれるジャンルに相当し、「政治や時評、日常生活、特に都市に住む人々の悲喜こもごもの出来事をテーマとする、およそ 1000 語以下の作品のことで、新聞や雑誌のコラム、または文芸欄に掲載されるものである」¹。クロニカの書き手であるクロニスタ(cronista)には、読者が楽に読めるよう平易な言葉や表現を用いて文章を綴ることが求められた。レーゴが「スポーツと人生」で扱ったテーマは、クロニカの中でもフットボールを中心としたスポーツ全般にわたっており、スポーツ・クロニカ(crônica esportiva)と言われている。小説家としての地位を

確立していたレーゴがブラジル・スポーツ界でも知られるようになったのは、主に『スポーツ新聞』の連載を通じてであり、フットボール人気を支える一躍を担った。

従来、レーゴ文学の批評家の多くは、そのスポーツ・クロニカをほとんど研究の対象とせず、フットボールへの狂熱振りをむしろ風変わりな特性と見なす傾向が強かった。しかし、生誕 100 周年を迎えた 2001 年以降、『フラメンゴ²は純然たる愛』(*Flamengo é puro amor*, 2002)を始めとするクロニカ選集や研究書が出版されるなど、クロニスタとしてのレーゴを再評価する動きも見られる。

そこで本稿では、ブラジルにおけるフットボールの受容から国民的スポーツへの道を歩む過程を振り返り、レーゴがスポーツ・クロニカを通じていかに「フットボールの国」(*o país do futebol*)のイメージを構築していったのかを浮かび上がらせたい。

1. 黎明期のブラジル・フットボール

(1) 人種主義のスポーツ

ブラジル・フットボール史は、英国系ブラジル人チャールズ・ミラー(Charles Miller, 1874-1953)が留学先のサウサンプトンからボール等を携えて故郷サンパウロに戻った 1894 年に始まるとされている³。当時首都であったリオデジャネイロでも、裕福な家庭で育ったオスカー・コックス(Oscar Cox, 1880-1931)がローザンヌでの勉学を終えて 1897 年に帰国し、フットボール普及のため、1902 年にはフルミネンセ F.C.の創設に尽力して初代会長に就任した。

このような背景から、当初フットボールは、英国人が上流階級の白人系ブラジル人に限定された高貴かつ人種主義のスポーツであり、経済的困窮者や非識字者は試合の観戦さえ許されなかった。試合中には専ら英語が用いられ、例えば、反則を犯した選手は“I am sorry.”と謝っていたという⁴。また、選手たちに声援を送る観衆の様子と言えば、男性はベストにスーツ姿で帽子を被って杖をつき、女性はくるぶしまで届く長袖ドレスにきらびやかな帽子で着飾

り、日傘を携帯するのが習慣であった。フルミネンセ F.C.の華やかなフットボール会場では、手に汗握る試合展開にハンカチを湿らせ感情を押さえなければならぬ淑女の姿が見られた⁵。

フットボールがブラジルの国民的スポーツになろうとは想像もできなかった時期（1905 年）、クロニスタのジョアン・ド・リオ(João do Rio, 1881-1921)は新聞『ガゼッタ・デ・ノチシアス』(Gazeta de Notícias)に以下のように記している。

ここで果たして新たなスポーツが流行するのだろうか？ 疑念はない。

（中略）今、あらゆる注意を惹き付けようとするフットボール。若者は（中略）専門的かつ難解な言葉で、フットボールのマッチ(*matches*)、ゴール(*goals*)、シュート(*shoots*)のことばかり話しているが、そこから我々の中に斬新な単語が生じよう⁶。

フットボールの専門用語については、1936 年に『スポーツ新聞』の所有者となった作家マリオ・ロドリゲス・フィーリョ(Mário Rodriges Filho, 1908-1966)が、スタジアムの観客席で話される日常表現を取り入れながら脱英語化を図る刷新を行う。とは言え、マリオ・フィーリョの影響を受けたレーゴのスポーツ・クロニカにも *scratch* (代表チーム)、*team* (チーム)、*crack* (名選手)等の英語表記が残っており、専門用語の完全なポルトガル語化は 1960 年代まで待たなければならなかった⁷。

フットボールが単なる流行に留まらず、ブラジル文化に浸透していく上では言語面だけではなく、黒人・混血選手の登場も必然の出来事であった。ブラジル・フットボール史上初の英雄と称えられたのは、ドイツ人の父と黒人の母から生まれた薄茶色の肌を持つアルトゥール・フリーデンライヒ(Arthur Friedenreich, 1892-1969)である。ブラジルは 1919 年の第 3 回南米選手権⁸を招致し、フリーデンライヒの活躍で初優勝を飾ると、1922 年には独立 100 周年記念の一環として同大会を再び自国開催して 2 度目の優勝を果たした。しか

し、1921年の大会ではエピタシオ・ペソーア大統領が黒人・混血選手を代表チームに招集しないようブラジル・スポーツ連盟(Confederação Brasileira de Desportos)に圧力をかけ、フリーデンライヒが参加できないこともあった。

翌1923年、リオデジャネイロのリーグ戦では、ポルトガル系の貧しい白人と黒人・混血選手で構成される C.R. ヴァスコ・ダ・ガマ (以下、C.R. ヴァスコとする) が初優勝を収めてブラジル・フットボール史に新時代の到来を予感させたが、フルミネンセ F.C.等の上流クラブは新リーグを発足させ C.R. ヴァスコの排除を試みた。自前の競技場でのみ試合開催を許可すると新リーグから条件を突き付けられたものの、C.R. ヴァスコを支持する一般庶民は寄付金を募って、1927年にサン・ジャヌアリオ競技場を完成させたのであった。

フットボール人口の底辺拡大に伴って、アマチュア制度からプロ化への移行が議論されるようになった。ただ、実態としては C.R. ヴァスコがブラジル・フットボール史の表舞台に登場する以前から、ビッショ⁹(bicho)と言われる勝利給が人種や貧富の差に関係なく選手に支払われており、アマチュア制度は崩れかけていた。さらに、レオニダス・ダ・シルヴァ(Leônidas da Silva, 1913-2004)、ドミンゴス・ダ・ギア(Domingos da Guia, 1912-2000)、ファウスト(Fausto, 1905-1939)ら優秀な黒人・混血選手が国外のクラブへ流出し始めると、ブラジルでは1933年にフットボールのプロ化が導入される。

(2) フットボールの受容を巡る文学論争

ブラジルでフットボールが普及していく過程において、その社会的影響力に注意を払ったジョアン・ド・リオを含むブラジル文学史に名を残す作家たちは、クロニカを中心とする作品でフットボールを描いた。特に、フットボール推進派のコエーリョ・ネット(Coelho Neto, 1864-1934)と強硬な反対派のリマ・バレット(Lima Barreto, 1881-1922)の対立はつとに有名である。

コエーリョ・ネットとフットボールの関係は、彼が1904年にフルミネンセ F.C. に隣接するところへ引っ越して来たことに始まる。その頃、リオデジャネイロではボートレース等が盛んに行われていたが、コエーリョ・ネットは身近な

新スポーツのフットボールを通じて、国民が身体的かつ精神的に健全な体を作り、規律を学ぶことが重要だと考えた。心身共に鍛えることで、ブラジル人が理想的な人種になるという優生学的思想の影響を受けていたのである。元々スポーツに関心を寄せ、カポエイラを実践する数少ない文学者の一人¹⁰であったコエーリョ・ネットは、1912年にフルミネンセ F.C.のソシオ会員になると、1915年には同クラブ初の応援歌を作詞する。その後は、ラランジェイラス競技場の建設会議責任者(1918年)、審議委員会メンバー(1920年)、芸術部長(1921年)を歴任し、1922年には榮譽ソシオの称号を授与された。

コエーリョ・ネットの息子たちもまたフルミネンセ F.C.でフットボールや水泳の選手として活躍するなど、まさしくスポーツ一家であった。父親は彼らの試合会場に足を運んで熱心に応援するのが習慣で、1917年頃の食卓の話題は文学よりもフットボールが中心であったという¹¹。

1919年1月21日、コエーリョ・ネットはフルミネンセ F.C.のプール施設落成式の演説でスポーツの利点を以下のように述べた。

勝利への努力は選手を慎ましく、節度ある人間にする。自制は決意を育む。自らの価値への信頼は落ち着きを与える。共通の生活習慣は社会的にする。規則的な絶え間ない努力は、炎が鋼を強くするとく耐久力を強固にする¹²。

一方、この演説をきっかけにコエーリョ・ネットを批判し始め、同年に「反フットボール連合」(Liga contra o football)を立ち上げたのが黒人奴隷の血を引く作家リマ・バレットであった。彼は、リオデジャネイロ郊外の貧しい家庭に生まれ育った環境から、フットボールを人種主義者のスポーツと捉え、舶来品を重宝する上流階級の模倣に過ぎないと糾弾した。バレットはコエーリョ・ネットの上記演説を受けて、雑誌『現代誌』(Revista Contemporânea)に寄せたクロニカでコエーリョ・ネットを名指して非難する。

コエーリョ・ネト氏は我々が知的世界で際立つ最も不幸な奴である。
(中略) 文学の使命は心と心を通わせること、(中略) ネト氏の作品のどこにそれがあるのか？ (中略) ネト氏は自身の名声に関わる威厳、文学者の使命たる高貴さを忘却してしまった。そのような不毛なことで演説をしに行くために¹³。

バレットにとって、コエーリョ・ネトの言動は富裕な家庭を喜ばせるだけの日和見主義で、フットボールに関心を向けることは文学者に相応しくないものであった。また何より、黒人・混血選手を排除する社会的支配の道具としてのフットボールは形を変えた奴隷制の継続であり、バレットの目には時代錯誤のものとししか映らなかったのである。

そこに我々のフットボールの甚だしい社会的欠点がある。人類の様々な部分で相互に深い理解を得ようと、人々の一層の幸福のため、あらゆる思想家が彼らの間の本来なら存在しない差異を除去しようとしている時期に、蹴るという行為をする試合は隔離を助長させ、政府はそれに補助金を出す¹⁴。

これは、「反フットボール連合」創設の経緯と目的について記者から受けた質問に対する発言で、新聞『街路』(A Rua)に掲載されたものである。同連合の活動目的は人種差別のスポーツと見なすフットボールの大衆化に疑問を投げかけ、社会に対する悪影響を訴えることにあり、その根拠として、試合中の怪我や事故、暴動に関する報道が頻繁に行われていたこと、リオデジャネイロとサンパウロの間で地域間摩擦を深刻化させていたことも挙げている。

バレットは死去する 1922 年までフットボールを批判し続けるが、すでに言及したように、この時期にはフットボール人口の裾野が人種や経済的状况に関係なく、社会的底辺にも拡大しつつあったため、「反フットボール連合」の活動は勢いを失うが、バレットの主張はブラジルにおけるフットボールの受

容の過程において無視することはできない。彼にとっては皮肉なことに、人種混成チームの C.R. ヴァスコガリオデジャネイロのリーグ戦で優勝するのは死後翌年の 1923 年であった。

このほか、20 世紀初頭から 1920 年代後半にかけて、詩人オラーヴォ・ビラッキ(Olavo Bilac, 1865-1918)は兵役義務を擁護する際に、フットボールを通じて身体を鍛えることが国の将来に資すると述べ、作家モンテイロ・ロバート(Monteiro Lobato, 1882-1948)は身体的向上が道德面にも好影響を与え、社会的な活性化につながると信じた。作家アルカンタラ・マシャード(Alcântara Machado, 1901-1935)は、短編「コリンチャンス(2)対パレストラ(1)」でラジオ中継を聞くかのようにフットボールの試合を躍動的に描いた。反対に、作家グラシリアーノ・ラモス(Graciliano Ramos, 1892-1953)はリマ・バレットと同様の立場から、フットボールを借り物の衣服に例え、外国生まれのスポーツがブラジル文化に根付くことはないと主張したのである。

対照的な見方ではあるが、「フットボールの国」と呼ばれる以前のブラジルにおいて、様々な文学者がフットボールについて言及したという事実は、フットボールがこの国に住む人々の日常生活へと溶け込みつつあった証左にほかならない。ブラジルの国民的スポーツとして定着するまでには、まだしばらく時間を要したものの、チャールズ・ミラーがフットボールを持ち込んだ 1894 年から 30 年余りの間に人気の礎は築かれていたと言えるであろう。

2. レーゴとフットボール

(1) フットボール界での活動

リオデジャネイロでコエーリョ・ネットやリマ・バレットらがフットボールの受容を巡って各々主張を展開していた頃、レシーフェ法科大学に在籍していたレーゴは政治問題を主題とするクロニカに熱中しており、フットボールには関心がなかったかのように思われているが¹⁵、レーゴ自身は「スポーツと人生」で次のように書いている。

アメリカ・ド・レシーフェに対するフラメンゴの勝利は、学生時代の良き時代を思い出させた。ジャケイラ競技場の“インコたち”を夢中になって応援していた頃である。

もうずいぶん前になるが、1922年の輝かしい日々のことであった¹⁶。

1922年には「夢中になって応援」するほどフットボールに関心を寄せていたものの、翌1923年に米国留学を終えて帰国した文化人類学者ジルベルト・フレイレ(Gilberto Freyre, 1900-1987)と運命的な出会いを果たしたことで、小説家への道へ誘われることになった。以後、1925年にミナス・ジェライス州で検察官、翌1926年からアラゴアス州で銀行監査官を務めると、1932年に小説『砂糖園の子』¹⁷ (*Menino de engenho*)で文壇に登場して作家ジョゼー・リンス・ド・レーゴの名前が広く知られることになる。

1923年のフレイレとの出会いが作家レーゴの誕生を導いたとすれば、1938年のワールドカップ大会におけるレオニダスの活躍はレーゴとフットボールのつながりを決定づけた。1935年にリオデジャネイロへ移住していたレーゴは試合のラジオ中継に耳を傾け、遠いフランスの地でプレーするレオニダスに魅了された。当時彼が所属していた C.R.フラメンゴと深い関係を持つのに時間はかからなかった。

レーゴは1939年に C.R.フラメンゴのソシオ会員になると、一般のファンとして応援するだけに留まらず、1942年から1944年まで同クラブの事務局長を務め、1948年には上級ソシオ会員の称号を与えられると、1951年に C.R.フラメンゴの欧州遠征団長に任命されスウェーデン、デンマーク、フランス、ポルトガルを歴訪した。これらと並行して、1943年にブラジル・スポーツ連盟(CBD)の秘書官に就任すると、1946年、1949年、1952年の3回にわたり同連盟の事務局長を経験し、1950年には長官代理も務めた。同年、ブラジルで開催されたワールドカップ大会では、国際フットボール連盟(FIFA)の関係委員会で優秀広告を選ぶ委員長の職務を果たす。さらに、1944年から1946年まで、当時カパネマ教育大臣官房長であった詩人カルロス・ドゥルモン・デ・アン

ドラーデ(Carlos Drummond de Andrade, 1902-1987)の仲介によって、全国スポーツ審議会(Conselho Nacional de Desportos)のメンバーにも選ばれた。

スポーツ・クロニカの執筆と同時にフットボール界での活動を順調に続けていたレーゴであるが、ブラジル代表チームの遠征団長として臨んだ1953年の南米選手権ペルー大会では、大きな失望を味わう。国内の報道で準備不足が執拗に指摘されレーゴ自身も批判の対象となり、結果も準優勝に終わったことで、大会後にレーゴは「スポーツと人生」を3年半以上も中断する。長女エリザベッチ氏の証言¹⁸によれば、国外移住を望んだほど落胆したというレーゴであるが、1957年以降はスポーツ・クロニカの執筆に復帰した。とはいえ、同年5月以降は体調を崩して入院し、「スポーツと人生」7月20日付けのクロニカは親友で詩人のチアーゴ・デ・メロ(Thiago de Mello, 1926-)の代筆により完成させたものであった。レーゴは9月12日、リオデジャネイロの病院で56年の生涯を閉じた。

(2) “フラメンゴ・リンス・ド・レーゴ”

リオデジャネイロの知的交流の場として、レーゴはジョゼー・オリンピオ書店の常連となり、グラシリアーノ・ラモスやジョルジュ・アマード(Jorge Amado, 1912-2001)らと親交を温め、1940年代頃からはC.R.フラメンゴの関連団体「黒い竜」(Dragões Negros)が集まるカフェ・レストラン「コロンボ」にも足繁く通った。そこでは、クロニスタのルーベン・ブラガ(Rubem Braga, 1913-1990)や作家マルケス・レベロ(Marques Rebelo, 1907-1973)らと昼食を共にし、フットボールを巡る問題について語り合った。

レオニダスの活躍をきっかけにC.R.フラメンゴにのめり込んだレーゴは、頭文字が小文字の *flamengo* を「C.R.フラメンゴのファン」という意味で使いながら、その魅力について記している。

世間の人たちは、なぜ私がフラメンゴ(*flamengo*)なのかを尋ねる。そして、私は自分が小説家であるのと同じようにフラメンゴ(*flamengo*)であ

ると世間の人に言っている。つまり、自分の良き本能の力に導かれて。

(中略) フラメンゴ(Flamengo)にはブラジル全土、全人種、全信仰、全階級、全ての寛大な情熱がある。こうして、衝動と熟考により自分はフラメンゴ(flamengo)。身も心も、いつでも、どんな瞬間でも自分はフラメンゴ(flamengo)。フラメンゴ(Flamengo)で私を動かすのは、その並外れた普遍性である。それは民衆のクラブである¹⁹。

世間の人たちは私にこう尋ねる。ところで、お前さんはフットボールで何をしようと言うのかね？ 愉しむことだと、ある人たちに言う。生きることだと、別の人たちに言う。そして、苦悩することだと、フラメンゴ仲間(flamengos)には言うだろう。実際のところ、フットボールの試合というのはボールを蹴ること、蹴り合い以上のものなのである²⁰。

レーゴと同時期、『スポーツ新聞』にクロニカの連載を行っていた詩人ヴァルガス・ネット(Vargas Neto, 1903-1977)は、ある試合の観戦中に周囲が神経質な様子で叫び声をあげていたところ、レーゴの冷静な姿を見て「この熱烈なファンは情熱と上品さを巧みに調和させられる」²¹と称賛し、「フラメンゴ・リンス・ド・レーゴ」と呼んだ。

レーゴのスポーツ・クロニカがフットボール人気を側面から支えていたことは、マリオ・フィーリョの実弟で劇作家ネルソン・ロドリゲス(Nelson Rodrigues, 1912-1980)のクロニカ「忘れがたきゼー・リンス²²」に書き残されている。

(レーゴは) ファンと確かな絆を結ぶことができたため、一般大衆にとって決してお偉い幹部ではなかった。彼と無名のサポーター、貧しいサポーター、内気なサポーターとの間には信頼、ほとんど慈しみがあつた。多くの人たちにとって「博士」ではなく、作家でもなく、ゼ

ー・リンスであった。ファンからは貧しい者、内気な者でもあるかのごとく同等に扱われていた²³。

一方、フットボールに対するレーゴの狂熱振りを快く思っていなかった作家の一人にオズワルド・デ・アンドラーデ(Oswald de Andrade, 1890-1954)がいる。オズワルドは、レーゴがフットボールに狂喜するのは、このスポーツがすでに国内で一定の人気を確立しているからであり、リオデジャネイロで自己宣伝の道具として利用しているに過ぎないと批判した。また、ジョゼー・オリンピオ書店の出入り口では、文学批評家に見捨てられるためには C.R. フラメンゴのソシオ会員になる必要があるとマリオ・フィーリョに語っている²⁴。さらに、クロニカ「ある応援者への手紙」では、フットボールが搾取のシステム、つまり、選手たちは引退後に世間から忘れ去られて貧困に陥ってしまうものだとして、文学よりもフットボールにのめり込む「ある応援者」のレーゴを酷評した²⁵。

しかしながら、オズワルドの批判とは裏腹に、レーゴにとってフットボールは自己宣伝の道具ではなく、読者・ファンと一つの空間を共有するものであった。レーゴのスポーツ・クロニカには、それが如実に反映されている。

3. レーゴが描いたフットボール

(1) スポーツ・クロニスタとして

マリオ・フィーリョの招聘に応じて『スポーツ新聞』のクロニカ「スポーツと人生」を連載したレーゴは、1945年3月7日から1957年7月20日までの約12年間（前述の長期中断期間を含む）で計1571作品を発表した。事実の客観的な報告や記録が求められる一般記事とは異なり、レーゴは C.R. フラメンゴへの特別な感情をありのまま語るにより、読者・ファンとの距離感を限りなく取り払うよう努め、クロニスタ・トルセドール²⁶(cronista-torcedor)と呼ばれた。レーゴにとって「スポーツと人生」は書き手から読み手への一方通行ではなく、書き手と読み手のコミュニケーションの場であった。この

距離感の近さはレーゴのスポーツ・クロニカの魅力の一つであり、それを象徴的に示すのが、「スポーツと人生」の初回に綴った C.R. ヴァスコのファンとの騒動である。

人生初の野次は、ユーモア溢れるクロニカの、誤解されたある単語ゆえに起こった。その野次の経験は馴染みの薄い“caviloso”がもたらしたのである。

拍手喝采や称賛の批評は作家にとって実に価値あるものだが、騒々しい声、“取るに足らぬ者たち”、罵倒を伴うその野次は、自分が本物の有名人という感覚を抱かせた。スポーツ・クロニカが文学論争や政治関連報道より激しい情熱の源であることを確認した。20 年以上ジャーナリズムに従事してきたが、たった一つの単語だけで、激怒した大衆からかつてない憎悪の一斉射撃を呼び込んでしまった²⁷。

誤解の発端は、レーゴが C.R. ヴァスコの監督を“caviloso”と評したことにあ
る。レーゴの地元ブラジル北東部では一般的に「巧みな」を意味する肯定的な形容詞が、南東部では「詐欺的な」という否定的な含意を持っていたために、サン・ジャヌアリオ競技場の傍聴席に姿を現したレーゴに対して、C.R. ヴァスコのファンが罵詈雑言を浴びせたのであった。この一件は、フットボール愛好家に及ぼすスポーツ・クロニカの影響力を示している。

C.R. ヴァスコは現在でも C.R. フラメンゴの仇敵であるが、レーゴがスポーツ・クロニスタとして活躍していた当時から対抗意識は強かった。そのため、C.R. ヴァスコが C.R. フラメンゴに勝利を収めた後は、ヴァスコ・ファンの反応も穏やかではなく、レーゴは次のように記している。

あらゆる様式の手紙を受け取った。ポルトガル色の強烈な表現で辛辣な言葉が込められた手紙や、ファンの単なる冷やかしのいう温い手紙。
(中略) それらの手紙が私を不愉快にさせたと言うのではない。反対

に、幾分の満足感さえ覚えた。少なくとも、一般大衆にとって自分が無価値の人間ではないことを知る喜び²⁸。

競技場における大勢のファンから受けた反応や試合後に届いた手紙について明らかにするという行為は、レーゴがスポーツ・クロニスタとしての存在価値を確認すると同時に、読者との近接性、コミュニケーション、率直なつながりを構築する意図でもあった。さらに、レーゴはヴァスコ・ファンに向けて書簡形式のクロニカ²⁹を書くことによって、「スポーツと人生」を一種の私的空間としつつ、一層深い相互交流を図ろうとしたのである。

(2) フットボールの国

レーゴが国内クラブの海外遠征や国際試合に対して極めて敏感であったのは、ブラジルが国際社会で認められる上でフットボールが有効なツールだと考えていたからである。そのため、1940年代後半、C.R.ヴァスコがイベリア半島遠征でバレンシア C.F.などに勝利を収めたことや、アメリカ F.C.³⁰がエクアドル及びコロンビア遠征を無敗で終えたことは、世界におけるブラジルの存在感を高めるものであると称賛した。特に、C.R.フラメンゴによる英国の名門アーセナル F.C.への勝利は、「フラメンゴは、ヴァスコと同じく、ここブラジルの暑い大地にフットボールがあることを証明した」³¹と興奮気味に述べ、「フットボールの国」として国民が矜持を抱く重要性を強調している。

1951年、レーゴは C.R.フラメンゴの欧州遠征団長としての職務を終えて、次のように総括する。

スウェーデンから戻り、フットボールは今日、我々の輸出品にとってのコーヒーと同様に非常に重要な製品だと確信している。

(中略) 試合終了後もなお、競技場に残った何千人ものフランス人が、我々の青年たちに拍手を送った。(中略) ブラジル・フットボールはその場にいた千人のブラジル人に、我々が世界最高であるという感覚を

与えた³²。

このクロニカが掲載された同じ紙面には、欧州遠征中の C.R.フラメンゴの役割を象徴する挿絵がある。ある人物が燕尾服にシルクハット姿の紳士たちが指さして「あの人たちはブラジルの大使たちかい？」と聞くと、もう一人が選手たちの方に指を向けて「いいや、大使はグラウンドにいる人たちだよ」という場面である。ブラジルにとっては何よりフットボールが外交に資するもので、選手こそ“本物の外交官”だと示唆されている。

翌 1952 年、レーゴはフランスを再訪してテニスの全仏オープンを観戦し、「外国を旅する者は至る所で、我々がどれほど世に知られていないかを感じ取る」³³と感情を吐露しているように、ブラジルの知名度が依然低いことに神経質な一面も垣間見せるが、ローラン・ギャロス競技場（テニスコート）では興味深い出来事もあった。それは、報道用の傍聴席で特別に観戦することを望むレーゴが親しい記者に案内され会場に到着した際、入口の警備員に入場を制止されるという一件である。

友人はあの男の抵抗を乗り越えるべく全力を尽くした。そこで、競技場の責任者を尋ねようと思い出した。それでも、男は譲らなかった。だが、友人が見事な腕前を見せた時だった。

「レーゴ氏はフラメンゴ選手団の団長として、昨年ここに滞在した。」
すると、その偉そうな男は立ち上がって、私の手を握ってこう言った。
「フラメンゴ、偉大なフットボールの夜。」

そして、報道用の傍聴席への無料通行証を私に手渡した³⁴。

恐らくフランス人である警備員の男は 1 年前、C.R.フラメンゴの試合を観て拍手を送った者の一人だったのであろう。レーゴはそのことに小さな満足感を覚えると共に、C.R.フラメンゴを通じてブラジルが「フットボールの国」と認識されつつある現実を実感したのであった。

(3) マラカナンの悲劇

1950年7月16日は、ブラジル・フットボール史上最大の悲劇として永遠に語り継がれる日であろう。ブラジルは、第2次世界大戦による中断期間を経て第4回ワールドカップ大会を招致し、「フットボールの国」として最高の舞台を整えるため、後にマラカナン(Maracanã)の名で親しまれる15万5千人収容³⁵の市立競技場(Estádio Municipal)を建設した。しかし、結果は周知のとおり、ブラジル代表は総当たり戦の決勝リーグでスウェーデン代表に7対1、スペイン代表に6対1で各々勝利を収めた後、ウルグアイ代表に1対2で敗戦を喫する。ネルソン・ロドリゲスが「我々のヒロシマ」³⁶と例えた、いわゆる「マラカナンの悲劇」である。決勝リーグで2連勝を挙げた際の興奮と、その後の敗戦による落胆の差は激しく、すでに優勝気分で浮かれていたファンは現実を受け止めることができなかった。レーゴは大会終了から2日後の「スポーツと人生」³⁷で、ウルグアイ戦後のブラジル国内はさながら葬式の雰囲気であったと書き綴っている。

うな垂れ、目に涙を浮かべ、言葉もなく、心から愛されたある父親の葬式から帰るかのように、市立競技場を後にする民衆を目にした。落胆した、いや落胆以上の、希望のない民衆を見た。あれは胸を締め付けられるものであった。(中略)

眠れない真夜中、自分は悪夢に陥ったかのように感じた。しかしそれは悪夢ではなく、敗北という凄惨な現実であった³⁸。

「マラカナンの悲劇」は、ゴールキーパーのバルボーザら一部の黒人選手たちが戦犯にされたことで、人種問題の再燃という副産物をもたらしたが、レーゴは自らを「社会の観察者」(observador social)と位置づけ、敗戦の意味を見直すべくワールドカップ大会開催までの過程に注目する。なぜなら、ブラジル・スポーツ連盟(CBD)の内部に身を置いていた立場で、招致決定からの準

備状況を誰よりも間近にブラジル人の力を観察していたためである。レーゴはクロニカ「ブラジル人の特性」で、「マラカナンの悲劇」に肯定的な考察を加えた。

誇張に陥ることを恐れなければ、私はこう言うだろう。好ましい印象であったと。(中略)ある大義のため、成果のため、挫折の苦悩のために結集することができる新しい人々。我々は2年も経たぬ内に巨大な競技場を建てた。これまで開催されたどの世界選手権よりも規律ある大会を組織した。ほぼ完璧なフットボール・チームを作り上げた。そして、タイトルが自分たちの両手から漏れ落ちた時、敗れるということを選び、騒々しい南米人にスポーツ倫理を教え諭した³⁹。

すなわち、勝利至上主義で失敗を認めない人間がいる中で、「マラカナンの悲劇」は自己反省を促す教訓だと捉え、新たな一步を踏み出す機会であると結論付けたのである。

おわりに

偉大な作家の一人としてブラジル文学史に名前が刻まれているレーゴは、スポーツ・クロニカの書き手になることで、文学とフットボールを調和させることに貢献した。「スポーツと人生」には、ブラジルが「フットボールの国」として対外的に認められるだけではなく、ブラジル人自らが矜持を持って意識できるよう鼓舞する面もある。

20世紀初頭から、様々な文学者が主に社会的差別や経済的格差の観点からフットボールを描いてきたが、レーゴが活躍した1940年代後半以降では、「ブラジルとは何か」という視点が強くなる。レーゴは「フットボールの国」とのイメージを構築すべく、「スポーツと人生」では読者・ファンとの交流を何より重視した。

ただ、歴史の皮肉と言うのか、レーゴはブラジル代表が1958年にスウェー

デンで開催されたワールドカップ大会で優勝する前年に死去してしまった。フットボールに狂喜したレーゴが世界一になるブラジルを目の当たりにできず、その興奮がスポーツ・クロニカとして後世に残されなかったのは、本人にとってはもとより、「スポーツと人生」の読者・ファンにとっても無念としか言えない。

注

¹ トイダ, 2015: 280.

² 1895年に創設されたリオデジャネイロを本拠地とする総合スポーツクラブで、正式名称クルーベ・デ・レガッタス・ド・フラメンゴ(Clube de Regatas do Flamengo)。フットボール部門は1911年に設けられた。

³ 1864年以降、英国水兵や商業船の乗組員がブラジル沿岸部でフットボールらしいボール競技に興じていたものの、近代的なフットボールとして十分に整備されてはいなかった。(Aquino, 2002: 24-25)

⁴ Aquino, 2002: 38.

⁵ 作家コエーリョ・ネト(Coelho Neto, 1864-1934)は、試合観戦中に暑さと緊張のため汗のしみ込んだ手袋やハンカチを握り締める女性らの姿に気づき、「握り締める女性」という意味で「トルセドーラス」(torcedoras)と呼んだ。後に男性形の「トルセドール」(torcedor)も作られ、「ファン・サポーター」の語源となった。

(<http://www.fluminense.com.br/site/futebol/historia/capitulo-i-o-surgimento/outros-simbolos/>)
最終アクセス：2016年2月22日。

⁶ 『ガゼッタ・デ・ノチシアス』1905年6月26日付け。新聞・雑誌からの引用は、ブラジル国立図書館デジタル(Biblioteca Nacional Digital Brasil)の保存資料による。

⁷ Hollanda, 2004: 146.

⁸ 当時1万8千人を収容したフルミネンセFCのラランジェイラス競技場で開催。多くの批評家は決して満席にならない壮大な建物と驚いたが、決勝のブラジル代表対ウルグアイ代表戦では観客席が埋め尽くされ、競技場内に入らなかった者が周辺の丘へ登って「観戦」という。(Souza, 2008: 29)

⁹ 「(人間以外の)動物」が本来の意味であるが、勝利給が犬、兎、雄鶏、雌牛を始めとする動物の時もあったため、「ビッショ」の名称が生まれた。交通費や遠征滞在費を含む必要以上の経費が支払われる事実上の給与であった。

¹⁰ Pereira, 2000: 206.

¹¹ Ibid, p.206.

¹² Ibid, p.216.

- ¹³ 『現代誌』1919年2月15日付け。
- ¹⁴ 『街路』1919年3月15日付け。
- ¹⁵ 「1938年までフットボールには無関心」であった。(Antunes, 2004: 50)
- ¹⁶ 『スポーツ新聞』1946年4月9日付け。アメリカ・ド・レシーフェは、1914年に創設されたペルナンブーコ州レシーフェを本拠地とする正式名称アメリカ・フチボウ・クルーベ(América Futebol Clube)。インコはクラブのマスコットである。なお、アメリカ・フチボウ・クルーベの名称を持つクラブはブラジル各地に存在するため、「アメリカ」に州名などを付けて区別することが多い。
- ¹⁷ 田所清克訳『砂糖園の子』、彩流社、2000年。
- ¹⁸ Rego, E., 1982: 201.
- ¹⁹ 『スポーツ新聞』1945年11月15日付け。
- ²⁰ Rego, 1981: 233.
- ²¹ 『スポーツ新聞』1945年10月30日付け。
- ²² レーゴは一部の文学仲間から、ゼー・リンズ(Zé Lins, Zelins)と親しみを込めて呼ばれていた。
- ²³ Rodrigues, 1994: 35.
- ²⁴ Antunes, 2004: 56.
- ²⁵ Andrade, 1971: 19.
- ²⁶ 注6を参照。
- ²⁷ 『スポーツ新聞』1945年3月7日付け。(Rego, 2002: 27)
- ²⁸ 『スポーツ新聞』1945年5月19日付け。
- ²⁹ 例えば、『スポーツ新聞』1946年8月21日付け(Rego, 2002: 61)では、冒頭に「親愛なるアルミランテ様」と書き始める書簡体のクロニカを発表している。「アルミランテ」(Almirante)とはヴァスコ・ファンを指す。
- ³⁰ 1904年に創設されたリオデジャネイロを本拠地とする正式名称アメリカ・フチボウ・クルーベ(América Futebol Clube)。
- ³¹ 『スポーツ新聞』1949年5月31日付け。1949年、アーセナルF.C.はブラジル遠征を実施し、リオデジャネイロとサンパウロで計7試合をこなした。この時、C.R.フラメンゴのほか、C.R.ヴァスコとサンパウロF.C.がアーセナルに勝利している。
- ³² 『スポーツ新聞』1951年6月26日付け。(Rego, 2002: 129)
- ³³ 『スポーツ新聞』1952年6月24日付け。
- ³⁴ 『スポーツ新聞』1952年6月25日付け。
- ³⁵ Moura, 1998: 11.
- ³⁶ 雑誌『現実』(Realidade)1966年6月号。
- ³⁷ 『フラメンゴは純然たる愛』のクロニカ選集者マルコス・デ・カストロ(Marcos de Castro)によると、『スポーツ新聞』は日曜日夕刊の発行がなく、毎週月曜日が休刊日であったため、大会後初めての新聞発行が7月18日であった。(Rego, 2002: 194)
- ³⁸ 『スポーツ新聞』1950年7月18日付け。
- ³⁹ Rego, op. cit., p. 236.

参考文献

- Andrade, Oswald de. 1971. “Carta a um torcida”, In: *Obras completas - v.5 Ponta de lança (polêmica)*, 2ª ed., pp.16-20, Editora Civilização Brasileira; Rio de Janeiro.
- Antunes, Fatima Martin Rodrigues Ferreira. 2004. “Com brasileiro não há quem possa!”: *futebol e identidade nacional em José Lins do Rego, Mário Filho e Nelson Rodrigues*, UNESP; São Paulo.
- Aquino, Rubim Santos Leão de. 2002. *Futebol, uma paixão nacional*, Jorge Zahar Ed.; Rio de Janeiro.
- Coutinho, Edilberto. 1991. “José Lins do Rego, futebol e vida: a emoção flamengo”, In: Coutinho, Eduardo, F.; Castro, Ângela Bezerra de, (org.) *José Lins do Rego, fortuna crítica*, pp. 117-123, Civilização Brasileira; Rio de Janeiro.
- Franzini, Fábio. 2003. *Corações na ponta da chuteira: capítulos iniciais da história do futebol brasileiro (1919-1938)*, DP&A; Rio de Janeiro.
- Hollanda, Bernardo Borges Buarque de. 2004. *O descobrimento do futebol: modernismo, regionalismo e paixão esportiva em José Lins do Rego*, Edições Biblioteca Nacional; Rio de Janeiro.
- Moura, Gisella de Araujo. 1998. *O Rio corre para o Maracanã*, Editra FGV; Rio de Janeiro.
- Pedrosa, Milton. 1967. *Gol de letra: o futebol na literatura brasileira*, Editora Gol; Rio de Janeiro.
- Pereira, Leonardo Affonso de Miranda. 2000. *Footballmania: uma história social do futebol no Rio de Janeiro (1902-1938)*, Nova Fronteira; Rio de Janeiro.
- Rego, José Lins do. 1981. *Dias idos e vividos: antologia de José Lins do Rego*, Nova Fronteira; Rio de Janeiro.
- . 2002. *Flamengo é puro amor: 111 crônicas escolhidas*, José Olympio; Rio de Janeiro.
- Rego, Elisabete Lins do. 1982. “José Lins do Rego, meu pai”, In: *Ciência & Trópico*, Fundação Joaquim Nabuco, v.10, n.2, pp. 193-202, jul- dez; Recife.

Rodrigues, Nelson. 1994. “Zé Lins inesquecível”, In: *A pátria em chuteiras: novas crônicas de futebol*, pp.34-35, Companhia das Letras; São Paulo.

Rodrigues Filho, Mario. 2003. *O negro no futebol brasileiro*, 4ª ed., Mauad; Rio de Janeiro.

Souza, Denaldo Alchome de. 2008. *O Brasil entra em campo! Construções e reconstruções da identidade nacional (1930-1947)*, Annablume; São Paulo.

Wisnik, José Miguel. 2008. *Veneno remédio: o futebol e o Brasil*, Companhia das Letras; São Paulo.

市ノ瀬敦. 2006 年. 『砂糖をまぶしたパス—ポルトガル語のフットボール』, 白水社.

トイダ, エレナ. 2015 年. 「クロニカ—ブラジル文学が生んだ独自のジャンル」, 『ポルトガル語圏世界への 50 のとびら』, 上智大学出版, pp.279-291.

リーヴァー, J. (亀山佳明、西山けい子訳) 1998 年. 『サッカー狂の社会学』, 第 2 版, 世界思想社.

(参考ウェブサイト)

Fluminense Football Club <http://www.fluminense.com.br/>

Biblioteca Nacional Digital Brasil <http://memoria.bn.br/hdb/periodico.aspx>